Kyoto Botanical Gardens

京都府立植物園

植物園整備に係る説明会

京都府

文化施設政策監

植物園

京都府立植物園について

府立植物園の概要

- 大正13（1924）年に日本で最初の公立総合植物園として開園して以来、植物を保存・栽培・展示し、広く府民の憩いの場とするとともに、植物の観賞を通じて教育・学習・植物学の研究に寄与するための施設「生きた植物の博物館」を理念として公開・運営。

総面積	約240,000㎡（24ha）		
入園者数	令和３年度　580,798人		
	令和２年度　574,084人		
	令和元年度　852,955人		
保有植物　約12,000種		シダ植物門	約　189種
		種子植物門	約4,759種
		園芸植物等	約7,000種

観覧温室（３代目）

植物園正門

府立植物園の整備経過及び検討経過

H21.10　**府立植物園「魅力あふれる施設」整備計画**

日本一おもしろい、心やすらぐ植物園　※おもしろい⇒心ひかれる、興味深い、楽しい

高山植物栽培室、植物展示場、北山オープンカフェ（現IN THE GREEN）賀茂川門、北泉門、ボタニカルテラス等を整備

H31.2　**京都府立植物園100周年未来構想**

京都が世界に誇る文化と憩いに包まれた交流エリアの形成

＜取組の方向性及び主な取組例＞

- ビジターセンター等を備えた複合的な正門エントランスの整備、観覧温室の改修・建替等の検討、植物標本庫、常設展示室、図書コーナー等の整備
- エリア内の回遊性の向上など、エリア内に立地する各施設との連携

R元.10　**京都府総合計画**
京都市域のエリア構想 「北山『文化と憩い』の交流構想」

京都が世界に誇る文化と憩いに包まれた交流エリアの形成

R2.12　**北山エリア整備基本計画**

「北山『文化と憩い』の交流構想」を実現するにあたり、北山エリアの整備の方向性を示すために「北山エリア整備基本計画」取りまとめ

R4.5～　**府立植物園整備検討に係る有識者懇話会**

「生きた植物の博物館」の理念の下、「京都府立植物園100 周年未来構想」を具現化するため、幅広い視点から多様な意見を聴取することを目的に「植物園整備検討に係る有識者懇話会」を設置

＜これまでの実施状況＞

- これまでに計４回の有識者懇話会を実施
- 主に魅力、学習教育、研究、栽培を４つの論点として、各委員が議論

＜第３回有識者懇話会(11月)での主な意見＞

- 100年の歴史を踏まえ、次の100年何を目指すのかを共有してもらいたい
- ハード整備の内容が具体的にどのように配置されるかを議論したい

並行して、植物園職員ワーキングや、地域の自治連合会の役員の方々や教育施設・福祉施設の方々などとの意見交換、府民の方々を対象としたワークショップを実施

府立植物園の現状分析

強み

【環境】
- １００年の歴史をもつ日本最古の公立植物園の一つ
- 世界都市である京都市内に位置
- 付近を流れる賀茂川を中心に、園周辺は良好な景観が形成
- 半木神社周辺に保存された賀茂川流域の原植生
- 非常に恵まれた来園アクセス
- 「大森文庫」をはじめとする貴重な書物集を保有

【取組】
- 継承されてきた高度な栽培技術
- 約300種類の絶滅危惧種を栽培保全
- 展示会、講演会等を通じた、園芸文化の普及
- 約7,000種類の園芸品種を栽培（古典園芸品種 約1,280種類）
- 日本最大級の温室で約4,500種類を展示、多数の国内初開花
- １７に及ぶ植栽エリアを整備
- 年間入園者数８０万人（公立植物園のうち日本最多）

価値

生きた植物のコレクション　約12,000種類

課題

【栽培・研究】
- 府内の植生把握等、植物多様性保全に向けた取組の充実のため、標本庫等の施設整備や体制確保が必要
- 植物の個体情報や栽培記録等など、収集されたコレクションや長い歴史で蓄積された栽培ノウハウが効果的に活用されるよう、データ基盤の構築が必要

【生涯学習支援】
- 子どもたちをはじめとする利用者が、植物の魅力を楽しみながら学ぶことができるコンテンツの充実や施設整備が必要
- 植物の役割や保全の重要性を多くの府民に伝えるため、学校等への出前授業やデジタル発信等、植物園外への取組の拡大が必要
- 生涯学習施設として学生ボランティア、NPO等、幅広い対象・世代が活動に参画できる基盤の整備が必要

【魅力強化】
- 子育て世帯や若者世代のニーズを満たせるよう、これらの世代が魅力的に感じる施設の充実や取組の強化が必要
- 植物と京都文化の関わり等、京都ブランドを活かし、世界に向けた魅力の発信が必要
- 限りある府財政のもと、魅力ある取組や園整備を継続して進めるため、寄附等の外部資金活用や入園料体系の見直し検討等が必要

次の１００年に向けた京都府立植物園像

将来ビジョン

- ■ 植物が生態系にもたらす役割をわかりやすく伝え、未来への種をまく植物園として、京都から世界の生物多様性保全に貢献する

コンセプト（基本方針）

- ■ 誰もが楽しく学べる「学びの入口」として学習機能を強化
- ■ 京都府内の植生把握等を通じた植物多様性保全への寄与

取組むべき内容

- ■ これまでの府民の憩いの場の機能に加えて、博物館機能を拡大
- ■ 次代を担う子供たちや若い世代向けの魅力を拡大
- ■ 植物多様性保全に関する研究機能を拡大

次の１００年に向けた京都府立植物園像（概念図）

次の１００年の府立植物園

現在の府立植物園

生物多様性センター等、他機関との連携

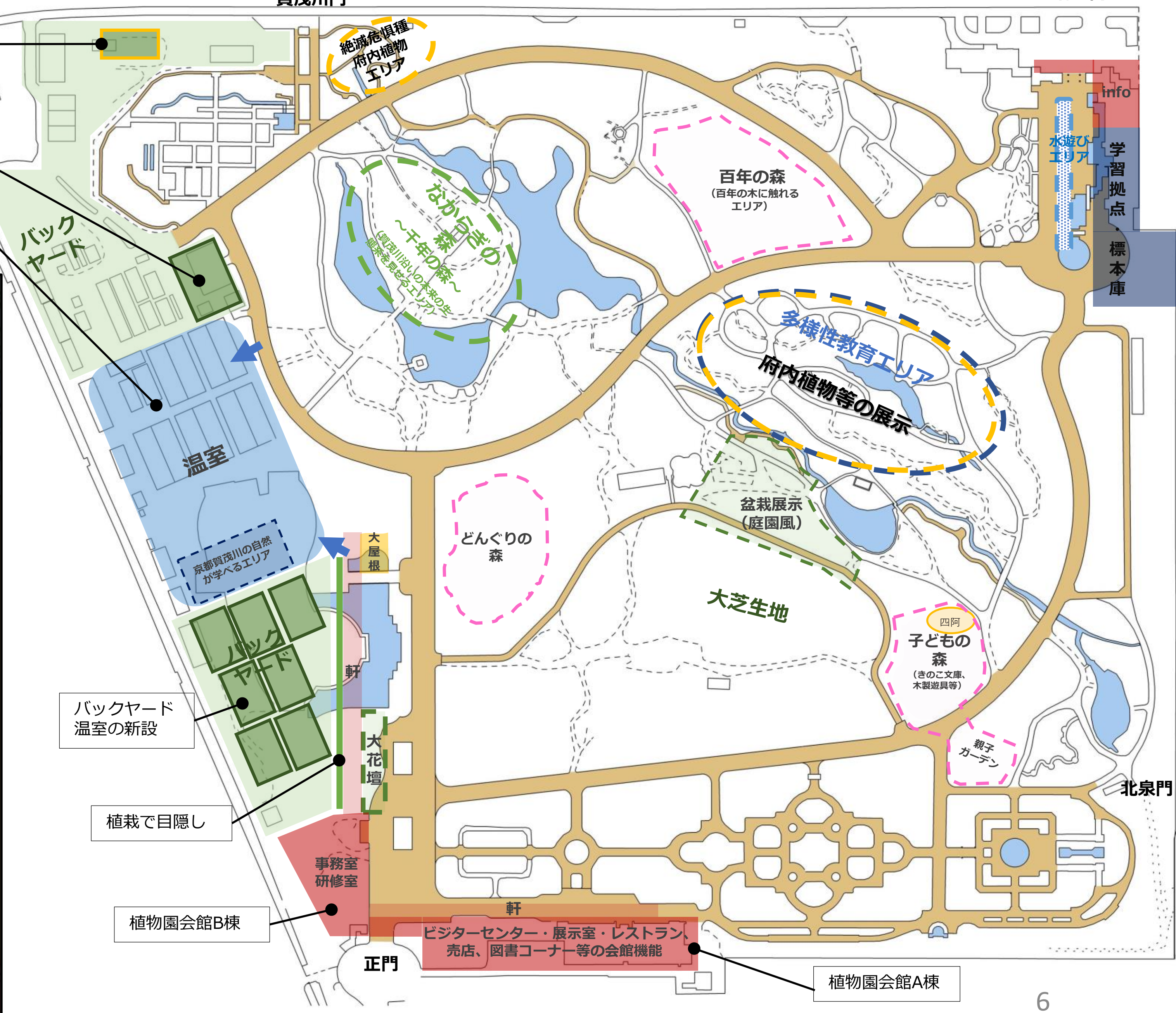
栽培・研究	世界植物の展示・観賞	園芸相談展示会	栽培技術等のデータ化	コレクションの維持・質向上による利活用の増加	保全につながる遺伝子データ等の利活用
生涯学習支援	わかりやすく面白い展示	植物園ガイドの実施	出前授業による植物学習	植物標本の閲覧・利活用	学生ボランティア、NPO等との協働
魅力強化	子育て支援快適な施設利用	憩いの場としての利用	植物観察・学習プログラム	体験型ワークショップの実施	生物多様性保全への理解促進

公園的機能

植物の博物館機能

植物園整備に向けた施策の具体的な方向性

想定される配置図１(温室を北側に配置)



想定される配置図２
(温室を南側に配置)

各配置図の特徴

<table>
<tr><th></th><th>配置図１（温室北側）</th><th>配置図２（温室南側）</th><th>現在の植物園</th></tr>
<tr><td rowspan="2">正門
植物園会館

子育て
若者向け魅力向上</td><td colspan="2">• ビジターセンターや飲食施設、子育て関連施設等の来園者快適機能を強化
• 正門から温室まで、雨に濡れることなく移動できるよう施設を配置
• 未来くん広場は大芝生地横に移転し、子どもエリア（きのこ文庫含む）と四阿を整備
• 現温室横の樹林地をどんぐり拾いができる森と位置づけ、ソフト機能を強化
• 親子ガーデンを沈床花壇北に設置（子どもの森と一体で運用）
• 北山門の噴水等を水遊びエリアに変更</td><td rowspan="2">• 植物園会館１棟（平成４年建設）
• 未来くん広場
• きのこ文庫
• 森カフェ
• 北山カフェ(IN THE GREEN)</td></tr>
<tr><td>• 正門西に会館B棟を建設
• 大屋根広場を温室横に設置</td><td>• 温室奥に会館B棟を建設
• 大屋根と広場花壇を組み合わせた広場設置</td></tr>
<tr><td rowspan="2">観覧温室</td><td colspan="2">• 新築（現温室が複雑な構造であり、水漏れ等の改善が見込めないため）
• デザイン等は今後の検討だが、１００年持つ形状の温室を目指す</td><td rowspan="2">• 平成４年に現地建替えにより建設（現在３代目）
• 池に浮かんだ金閣寺と北山連峰のシルエットをイメージ</td></tr>
<tr><td>• 現温室北側に建替
• 鏡池を修繕し、景観として活用</td><td>• 現温室南側に建替
• 鏡池は廃止</td></tr>
<tr><td>バックヤード</td><td colspan="2">• バックヤード拡充
• 温室の建て替えに合わせ、バックヤード温室を複数棟建て替え
• 上記建て替えに合わせ、「見せるバックヤード」を新築
• 植物多様性保全に資する系統保存のためのバックヤード温室を増築</td><td>• ３代目温室の建設に合わせ現バックヤードを整備
• 絶滅危惧種保全温室１棟</td></tr>
<tr><td>教育学習
研究機能</td><td colspan="2">• 北山門に標本庫、学習拠点棟（常設展示等）を新設
• 園地北側の百年の木が多い場所にツリーウォークや木に触れるエリアを設置
• 植物生態園を多様性教育エリアと位置づけ、ソフト機能を強化
• 京都賀茂川の自然が学べるエリアを設置し、ソフト機能を強化</td><td>• 植物展示場で栽培植物等を展示
• 絶滅危惧種園で希少植物を展示</td></tr>
</table>

各エリアの説明

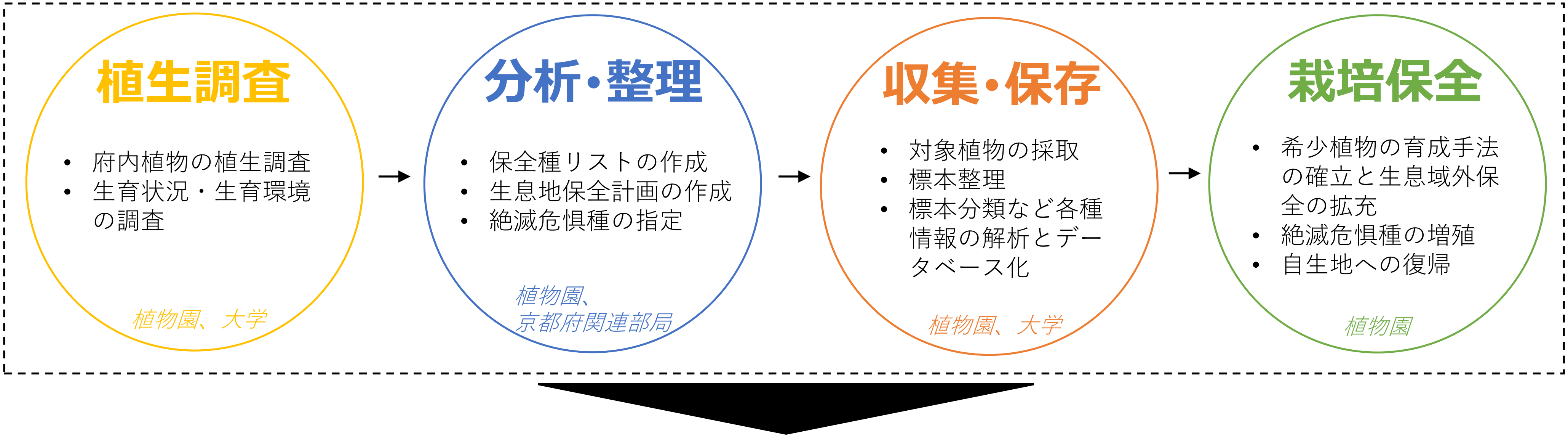
エリア名	エリアコンセプト	想定するハード整備、ソフト施策
植物園会館A棟	メインエントランスとして正門と一体的に整備 （入園しなくても府立植物園を楽しむことができる施設を配置）	ビジターセンター、展示室、レストラン、売店、図書コーナー、ボタニカルショップ等
植物園会館B棟	快適性向上や植物理解を深めるための施設を整備 （バックヤードに隣接して事務室を配置）	温室展示室、研修室、カフェ、事務室等
子どもの森	大芝生地の横で、主に低年齢の子どもが、樹木の中で遊ぶエリア	きのこ文庫の移転・リニューアル、木製遊具等
百年の森	古くからある貴重な樹木が多い場所であり、主に高学年の子どもが樹木に触れ、学びながら遊ぶエリア	鳥の目視点で植物が観察できる吊り橋(キャノピーウォーク)等
どんぐりの森	どんぐり等の植物に触れあえるエリア	ワークショップ等
親子ガーデン	親子で植物に触れ、親しむことができるエリア	植栽エリア整備、親子ワークショップ　等
水遊びエリア	涼みながら子どもが遊べるエリア	地面から出る仕掛け噴水　等
学習拠点・標本庫	園内で行う学習の取組や植物多様性保全の取組を推進する拠点	標本庫、標本閲覧、植物多様性保全に関する展示、園内学習プログラムの提供、植物画ギャラリー　等
多様性教育エリア	植物生態園（自然に近い状態で栽培）の中で、生物多様性を学習することができるエリア　（植物生態園を学習面から魅力強化）	展示強化、デジタルコンテンツの整備　等
なからぎの森 （千年の森）	賀茂川流域の原植生が残されたなからぎの森で、自然を体感できるエリア	現状の原生林の姿を保全、ガイドツアー　等
賀茂川の自然が学べるエリア	賀茂川流域の原植生・自然や外来種等を学ぶことができるエリア	賀茂川流域の植生等を学習できる新規エリアの整備
絶滅危惧種展示	希少種の展示や植物多様性保全の取組をわかりやすく展示し、活動を普及するエリア（絶滅危惧種園を強化）	展示強化、デジタルコンテンツの整備　等

京都府立植物園として行うべき研究とは

1. 植物多様性の解析と保全の研究を公的機関として使命感を持って取り組む。特に京都の植物について重点的に調査分析し、データを蓄積する
2. 希少な植物の栽培技術を蓄積することで、栽培手法の確立に努める
3. 植物園の有する知見により生息域外保全や希少植物の増殖を行い、データ分析や分類等については大学等と連携して実施する
4. 地域団体をはじめ、多様な主体と連携し、生物多様性及び自然環境の保全に取り組む

＜研究概念図＞

プロジェクト全体管理：植物園



府民への還元

- 地球環境の悪化とともに進む生物多様性の喪失に対し、府域植物の植生状況を正確に把握し、京都の植物多様性保全に寄与
- 来園者や次代を担う子どもへの植物多様性、府域植物等に関する教育的還元、生涯学習支援、植物資料・研究フィールドを提供
- 蓄積した栽培技術を広く発信し、園芸文化の普及発展に寄与

京都府立植物園における学際的研究拠点機能のイメージ

目　的

■植物園と大学、研究機関等との連携により、植物に関する学際的な研究拠点として研究・教育機能を強化

■植物園のハード・ソフト両面での取組により、将来の京都を担う子どもたちをはじめ幅広い世代が植物に触れながら自然環境や植物と人との関わりを学べる場を提供

京都府立大学

新自然史科学創生センター

・各教員の研究の枠組みを超えた学際的な学術研究と情報発信
（文学部・公共政策学部・生命環境科学研究科のリソースを活用し、新自然史科学の創生を通じた生物多様性保全等の取組みやミュージアム機能の推進）

京都府立植物園

・世界の植物を栽培・展示
・展示等を通じた教育・学習
・植物多様性保全に向けた調査・研究
・憩いの場の提供

連携

＜連携により実施する取組＞
・植物園内の植物、動物、昆虫、土壌等を教材にした一般向け野外観察授業を実施（サイエンスツアー）
・植物園をフィールドにした特別授業（府大生向け）
・植物園での学術講演（一般向け）
・植物園を利用した自然史系基礎研究

京都大学　連携

生物多様性センター　連携

総合地球環境学研究所　連携

4園館（動物園・水族館・青少年科学センター）　連携

＜連携により実施する取組＞
・植物多様性に関する分析と共同研究
・京都気候変動適応にかかる情報収集
・次世代への自然環境学習・体験、啓発
・絶滅危惧植物の保全活動

アウトプット（直接的な府民還元）

植物に関する学際的な研究機能の強化

①植物学、森林科学、昆虫学、動物学、土壌学、文学、史学、公共政策学など多角的な視点による研究・教育体制の構築
↓
②生物多様性維持や地球環境保全をはじめとした植物にまつわる共同研究の活性化
↓
③研究成果を反映した自然史博物館的な展示やサイエンスツアー等の組織や専門分野の枠を超えた教育普及活動

アウトカム（将来的な目標）

- 持続可能な未来の創造に寄与
- 生物多様性と自然環境の保全
- 植物園のリソースを活用した自然科学に関する教育水準の向上